

義務教育学校

現在の小中学校



小学校



中学校

・小学生と中学生は、それぞれ別の学校で過ごします。

義務教育学校(施設一体型)



義務教育学校

・小1で入学し、中3で卒業するまで、9学年が同一の学校で一緒に過ごします。

義務教育学校の特徴

1. 小・中学校が目指す子ども像を共有し、9年間一貫した系統的な教育課程を編成・実施することができます。
2. 小学校と中学校の教員組織が一体となることから、児童生徒に関する共通理解が十分に図られ、小中学校の接続の円滑化を図ることができます。
3. 子供たちの実態に応じて、「4-3-2制」や「5-4制」と柔軟な区切りを設定することができます。
4. 地域の将来を見据えた教育課程（例えば「ふるさと科」など）の開発・実践に取り組むことができます。

施設一体型の義務教育学校だとこんなメリットが…

小中学校の
教員同士で
密な連携が
可能

乗り入れ授業や小学校での
教科担任制をスムーズに実施

複数の教員による指導、学習意欲の向上

9年間を通して子どもの学力、人間関係、
健康状態などの情報を教員全体で共有

中1ギャップの緩和、教職員の意識・指導力の向上

異学年交流
がスムーズに

【上級生】リーダーシップを発揮、思いやり
【下級生】憧れのまなざしで将来像を描きやすい

心の成長(社会で生きる力や人間性を磨く)

義務教育学校のカリキュラム例

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
教育課程	前期課程						後期課程		
学年区分	ジュニア				ミドル		ハイ		
教科指導	学級担任制				一部教科担任制 (英語、算数、理科など)		教科担任制		
外国語	専属のALTが常駐								
部活動					部分的に参加		年間部活動		
入学式等	入学式					前期課程 修了式	後期課程 進級式		卒業式
運動会・体育祭	1～9年生合同実施								

見沼中学校区の課題

課題：学級数が少なく、全ての教科で正規の中学校教員の配置が困難。

▶義務教育学校とすることで、小学校と中学校の両方の免許状を保有している教員を優先的に配置し、全ての教科で正規の中学校の免許状を保有している教員を確保します。

課題：小中一貫教育を進める際に、中学校教員が1教科1名しかいないため、違う場所にある小学校に出向いて、授業を指導することが難しい。

▶義務教育学校では同じ校舎にいるため、日常的に中学校教諭が小学校の授業に参加でき、英語など専門的な指導により、学力向上を図ります。

課題：生徒数が少ないため、部活動の種類や1つの部当たりの部員数が少ない。また、保護者数が少ないため、PTA活動の保護者の負担が大きい。

▶義務教育学校では5～6年生が部分的に部活動に参加することで活性化します。また、保護者数が増える事により、PTA活動の保護者の負担が減ります。

義務教育学校のQ & A

Q：小学生と中学生が一緒の校舎に通うことになり、環境の変化による児童生徒の不安や悩みが大きくなってしまわないか？

A：新たな人間関係の構築が円滑に行えるように、開校まで交流事業を継続して実施します。また、開校前後に相談員を配置します。

Q：義務教育学校では入学は1年生、卒業は9年生となることから、従来の小学校卒業や中学校入学という節目の行事がなく、小学校卒業の達成感や中学校入学の新鮮さが無いのではないかと？

A：前期課程修了式、後期課程進級式など他校の実施状況を研究し、節目となる行事を実施します。

Q：9年間同じメンバーとなり、人間関係が固定されてしまうのではないかと？また、一般的に最高学年がリーダーシップを発揮する学年になるが、義務教育学校の場合は最高学年は9年生の1回しか機会がないことになり、リーダーシップを養う機会が減ってしまうのではないかと？

A：異学年交流を充実させます。遠足や運動会などでは、上級生と下級生の組み合わせを工夫し、9年生以外にもリーダーシップを育む機会を増やします。

Q：小中学校それぞれに独自の文化や考え方があり、認識や意見の違いなどによるすり合わせに時間を取られ、教職員の負担が増えてしまうのではないかと？

A：校長や教頭を中心に、小中それぞれの独自の文化や考え方を踏まえて、教職員の共通認識のもと、お互いに協働できるように努めます。